

踏襲されるべきであろう。

一件、言わずもがなのことであるが、歴史学・考古学の発表においてパワーポイントの操作がすでに必須となっていることをあらためて感じた。機能的かつ効果的に機器を使いこなす発表者の方々を見ながら、それら技術的な素養がまったく欠けている我が身と引き比べて、忸怩たる思いが去らなかったことを付言しておく。

ちょうど新制度との端境期にあることから、これまでと授業編成が若干異なっていることから、運営に携わった方々はどの時間帯に設定するか、大分苦慮されたと仄聞した。時間割が落ち着くまでこれからの数年間は、事前に細かな打ち合わせが必要となろう。末筆ながら、講演会が開催されたそれぞれの時限を空けていただいた先生方のご厚意に感謝したい。

〈第一回〉

往生際の良い日本史

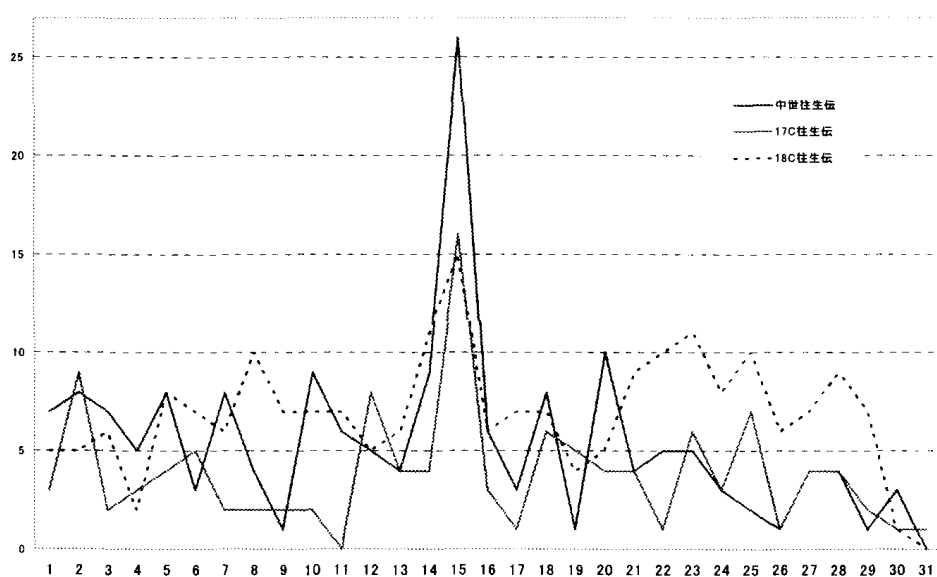
黒田 智

たとえば、中世の日本人は、いつ死にたいと願ったのだろうか。

平安時代から明治時代にいたるまで、日本では往生伝という一連のテキストがつくられてきた。往生伝とは、極楽浄土に往生をとげることができた人々の、その死にざまの記録である。下のグラフは、一二世紀から一八世紀までにつくられた往生伝をもとに、往生した日付けごとの件数を折れ線グラフであらわしたものである。

グラフをみると、中世（一六世紀以前）の往生は、一五日が飛びぬけて多いことがわかる。月別にみると、八月がもっとも多く、二月がこれについている。さらに時刻では「午の正中」という表現が頻出する。つまり、八月（あるいは二月）一五日正午こそが、中世的な往生における理想の日時

であったわけだ。「願わくば花の下にて春死なむその如月の望月の頃」。西行が詠んだように、慢性的な飢餓状態にあった前近代の日本社会では、麦などの畠作物の収穫を待ちきれず、春にもっとも多く死亡して



いたことが明らかにされている。しかし、往生の季節性は、こうした自然死とはまったく異なる特徴をもっていたことになる。

太陰暦を採用していた前近代において、一五日は満月の日である。どうやら往生の日時は、月の満ち欠けと関係していたようだ。とりわけ八月一五日は、仲秋の名月にあたる。かぐや姫の昇天や弘法大師の誕生にも、満月が大きくかわっていたことが思い出されるだろう。

また二月一五日は涅槃会がとり行なわれる釈迦の命日であるのに対し、そのちょうど半年後にあたる八月一五日は八幡宮などで捕獲した魚や鳥獣を池や野に放ち、生きとし生けるものへの殺生を戒める放生会がもよおされる日である。こうした仏教的な死生観や殺生観も、少なからぬ影響を与えていたと思われる。

しかし、こうした傾向は近世に入ると変化をきたす。一七世紀には二月のピークは消え、八月から一〇月までの秋に集中するようになる。また一五日の往生は引き続き

多いものの、概して平坦な曲線を描くようになり、一八世紀には下旬の往生も増加する傾向を示す。さらに、正午に加えて「暁」の往生がしばしば見受けられるようになる。もはや中世的な往生は、遠い忘却のかたに消えてしまったかのようにみえる。

ただし、昭和二〇年（一九四五）八月一五日正午は、ポツダム宣言受諾を伝える昭和天皇の玉音放送が全国に流れた時でもあった。現代の日本人にとっては、「終戦の日」に慰霊の黙祷をささげる瞬間として深く記憶の底に刻みこまれることとなった。中世的な往生の理想は、今も生き続けているように思えてならない。

古代中国との接点

森 和

今日は、進級ガイダンスの一環というところで、大学で「歴史学」を学び、研究するということはどのようなことなのか、具体

的に何をするのか、ということの一端を、私個人の経験に基づいてお話したいと思います。

私が研究の対象としているのは古代の中国、主に秦の始皇帝が大陸を初めて統一した紀元前二二一年を挟んで前後二、三百年、戦国時代から前漢時代までです。今の私たちが生活している日本から見れば、海を一つ隔てた大陸の、なおかつ二千年以上も前のこと、つまり空間と時間、そして社会が全く異なる世界の事象について研究しているわけですが、そのためには、この異文化世界との接点が必要になります。それが「史料」に他なりません。特に中国では、歴代の王朝がそれぞれ前代の王朝の歴史について編纂した「正史」を始めとする様々な文献が残されており、それらを主たる史料として歴史学いわゆる文献史学が成立しています。私が対象とする時代で言えば、正史の筆頭に挙げられる『史記』、それに続く『漢書』があります。ところが、これらの文献史料には、編纂者の視点・関心の